

親が求める地域小学生サッカークラブのコーチ像

The image of soccer coach for regional elementary students for which parents ask.

1 K08A212-8 宮田 直紀

指導教員 主査 堀野博幸 先生 副査 倉石平 先生

【序論】

今、日本のサッカーの発展は目覚ましいものである。その中でも次世代の日本サッカー界を担うである第4種に登録されているチーム数は8,399チーム、選手の人数は29,293人となり、共に増加している(JFA,2011)。指導者も、新しく設置されたコーチングライセンスD級において33,272人のライセンス資格者がいる。次世代の優秀な子どもたちを指導する環境というものが整ってきていると言えるだろう。

サッカーの発展に伴い、親がサッカーコーチに求めることも増えてきている。金子ら(2008)では、体力や運動能力の向上、サッカーが好きになるといったサッカーに直接かかわる側面で、親の高い効用感が得られているとしている。そのため、子どもの成長を家庭、学校にプラスして地域スポーツや習い事を通して、親が求めることが多くなってきたと言えるだろう。

サッカーだけでなく、試合の移動では首都圏に向かうために満員電車やバスにも乗る機会が多くなることから、そのような社会的場面における行動というものは、小学校の低学年からでも体験することが多く、サッカーを通して、多くの人との交流を通して、礼儀やマナーというものを学ぶことができる。その中で、小学生の親としては、地域のサッカーチームに所属させることによって、そのサッカーチームから子どもに対して、何を学ばせたいのか、また指導者であるコーチに対して、子どもたちに何を伝えて欲しいのかを考え、それを実行できる環境に近づけるようにしていきたい。

【方法】

川崎市サッカー協会第4種(少年)委員会に所属・加盟し、第18回かわしん杯ジュニアサッカー大会に出場しているチームの親を対象にアンケートを実施した。この年代の子どもの親を対象とした理由は、子どものスポーツ活動の場合、子どもの自発的な意思というよりも、親が決定する場合が多く、その影響力が非常に大きい(金子ら,2008)ことや、習い事において、

変化が一番生まれる時期(ベネッセ,2007)であるということが理由である。

【結果】

SPSSを用い、重み付けのない最小2乗法、バリマックス回転によって因子分析を行った。

その結果から、決勝トーナメント3回戦(ベスト16)まで勝ち上がったチームの親(78名)をカテゴリーA、それ以外チームの親(72名)をカテゴリーBとして分け、1つのカテゴリーから4つずつの因子を抽出した。

カテゴリーAの因子からは、「今の現状」、「家庭的役割」、「サッカーメイン主義」、「礼儀」が抽出され、カテゴリーBの因子からは、「今の現状」、「教師的役割」、「文武両道主義」、「礼儀」となった。「今の現状」、「礼儀」は両カテゴリーとも、同じ因子として扱うことにした。

また、アンケート結果においても、教育面の充実や重要性を求める回答が多くなった。特にここでは、握手の重要性についての回答が多くなり、川崎市サッカー協会が推奨する握手の重要性を親が理解する形となって表れている。教育面では、公共施設におけるマナー、言葉づかい、挨拶の重要性を多く求める親が多かった。

【考察】

カテゴリーAでは、サッカーコーチを身近に感じ、サッカー生活に臨むことが親子で出来る環境にすることを望んでいる親が多く、サッカーに対して積極的になっていると考えられる。カテゴリーBでは、チームプレーにおいて、サッカーコーチが先生役となり、子どもの見本になることや、サッカーだけでなく、普段の生活との両立を出来るようにすることを望んでいると考えられる。また、両カテゴリーとも、礼儀は厳しく教えることを望んでいる。

親がサッカーコーチに求めることは、チームの強さによって異なるが、親や子どもとコミュニケーションをとりながら、サッカーだけに限らず、コーチと親がお互いに協力することで、そのチームにあった行動をとることが一番重要であるだろう。

